

日本IT書紀

009 偶然の資料

02 溟滓篇
卷之一 契機

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第九

偶然の資料

一

わたくしごとの続き。だが、時を戻す。

どこまで戻すかというところ、筆者が本書を書くことを思い
たつ経緯のところである。オイルショックから二〇〇三年
六月に飛ぶのだから、ワープといったほうがいい。読者に
戸惑いを与えることになるかもしれない。

新聞社の日常に厭いたこの者（筆者のことだが）は、な
るほど「下天のうち」という思考はあったにせよ、「思い
立ったが吉日」とばかり、前後の見境もなく走り出すよう
なことはさすがにしなかった。諸先輩やITサービズ業界
の親しい人々に相談することを忘れなかったのは褒めてあ
げていい。

梅雨明けのころ、ある人と会った。

縷々、事情と状況を説明した。

「しおどぎ、というものかもしれません」

わたしは言った。

「これを発奮材料に、と考えているのです」

それを聞いて、相談の相手は私の年齢を聞き、

「で、これから何をするつもりかね？」

と尋ねた。

「とりあえず、自分の来し方をまとめておこうと思って
います。卒業論文のつもりで」

と言うと、その人はややおいて、

「この業界で何年になるかな？」

と訊いた。

「前の仕事を含めると、三十年近くになりますか」

たしかに計算センターで仕事はしていた。

バッチ処理の伝票を回収し、パンチ室行きの箱に入れる。
時にはパンチ室に直接持ち込む。パンチャーのチーフに頼
み込んで仕事を割り込ませてもらい、明け方、眠そうな目
をしたオペレーターを励まし、客先に頭を下げた。帳票の
在庫切れに気がつかなかった担当者の代わりに、印刷会社
まで車を飛ばしたこともあった。部長、課長あるいは得意
先の担当者の送り迎えもした。

だがそれは、仕事をした、ということに過ぎない。

それだけの理由で、新聞社では「ソフト／サービズ担当」
ということになった。

取材の仕方も分からないまま、入社とほとんど同時に取

材の現場に出た。名刺すらなかった。泳ぎを教えるのに、沖に漕ぎ出した舟から子どもを放り投げるのと似ている。

—— 御社担当になりました。ご挨拶に伺いたい。

そういうふうには電話で言え、と教えられた。

なるほど、広報の担当者が会う時間を作ってくれた。

約束した日に、指定された時間に出向くと、

「もうちょっと勉強しておいで」

と言われることの連続だった。

会っておきながら、何だ、と思わないこともなかったが、それが業界の接し方だった。

訪問するのが初めてであれば、その会社について、あれもこれも分かっているはずはない。だが、分かるうとしない人間を受け入れるほど、企業は甘くなかった。ある意味でこの洗礼は親切というものだった。

後年、親しくなった広報マンの一人にその話をすると、

「いや、そんな失礼なことをしましたか」

と恐縮させてしまったが、わたしは感謝していたのだった。

最初に話を聞きに行ったソフト会社は、そのときまだ、従業員が二百七十人、売上高は三十億円前後ではなかったか。「ソフト協」「センター協」と呼ばれる二つの業界団体があつて、人が集まってはワイワイガヤガヤとやっている

感じだった。

そのうちおおよその枠組みが認識でき、業界の課題とさ
れていることがあらまし理解され、多くの人の知遇を得て、
様々な事柄を教えてもらった。

当時、情報産業の主役はコンピュータ本体だったから、
新聞社のなかでソフト／サービ担当というのは枠役、添
え物的な立ち位置だった。しかし幾つかの幸運が重なって
ソフト／サービス会社からコンピュータ・メーカーの動き
や次期新鋭機の情報を得ることができた。そんなこともあ
つて、気がついたとき、名刺の肩書きが「編集長」になっ
ていた。

「ソフト業界の歴史、みたいなことになるのかな」

「確認したいなものでしょうね。こころざしというか熱
気というか」

「こころざし、ね……」

「それと……」

わたしは言いよんだ。

だが、その人は見透かしていた。

「それと、業界への恩返し、といったところかな？」

言いながらソファから立ち上がり、ファイル棚の引き出
しから書類を探り当てた。

「わたしは結局、何もまとめることができなかったがね。

そういうことなら、微力ながらお手伝いさせていただこう。これを参考にしたらどうだろう」

渡されたのは、雑誌の抜き刷りを袋とじにした小冊子だった。

二

手渡された小冊子には、『座談会・ソフト協設立当時は振り返る』というタイトルがついていた。サブタイトルは、「14年間で世界会議を開催できるまでに発展」である。

総ページ数は十ページで、第一ページ目に座談会の様子を伝える写真が付いている。

出席者は

- ・吉田剛（ソフト協初代専務理事）
- ・大久保茂（㈱コンピュータアプリケーションズ社長）
- ・舟渡善作（日本コンピュータ・システム㈱社長）
- ・下條武男（日本コンピュータ・ダイナミクス㈱社長）
- ・司会・河端照孝（㈱コンピュータ・エージ社社長）

の五氏。

名前を聞けば、長く業界に在住の人なら、

「ああ、あの……」

という古顔ばかりである。

現役で頑張っている人もいれば、すでに引退した人もいる。間違いないのは「みんな歳を取った」ということだ。

少し長いが、その書き出しを紹介する。

河端

なつかしいお顔がそろったところで始めさせていただきます。吉田さんは、ソフト協初代の専務理事、数々の功績を残しましたが、専務理事のお仕事は、日本情報処理開発センター（現日本情報処理開発協会）の専務理事と兼任されてでしたね。

吉田

そうなんです。十五年ほど前になりますが、通産省から新発足するソフトウエア産業振興協会の専務理事をぜひ引き受けてくれと言われて……。発足する以前に通産省から頼まれて手伝った関係からです。

大久保

吉田さんには、発足前からお世話になりました。

この協会の発足前には、やはりいろいろありまして、河端さんなんか良く知っています。ごく当初は、ソフト業もセンター業も一緒になって一つの団体を作ろうということで、確かサンケイ新聞の当時社長であった稲葉秀三先生のところみんな集まっ

た。その当時のことは、たぶん、歴史に残っていないでしょうね。

河端 センター協が数年前にまとめた『センター協一〇年史』に少し出ています。四十三年頃ですが、金岡さん、大久保さん、塚本さん、大野さん、それに日本ソフトウェアの園部専務とかで何回も話し合いましたが、通産省の平松さん（現大分県知事）のあたりで二つの協会構想が生まれてきたんだと思います。

吉田 当時はMISブームに火がつく頃でね。私はそれよりもソフトウェアをこの日本に育てることが、情報産業を発展させる柱だということに燃えていた。確か当時「四社会」というのがあったね。大久保さんのところと、服部さんの会社と今はないが日本ソフトと、それに日本EDPの四社……。

大久保 「四社会」、懐かしいね。ありました。今、コンピュータ・エージ社から資料をもらったんですが、設立発起会社の資料ですが、この資料に載っている会社以外にもあったような気がする……。

下條 はじめに四社が集まって、何かしようということですが八社が増えたんですね。発起人会社が集まって四十五年六月に宮沢喜一通産大臣に、設立申請書を出して認めてもらったのですから、今の話は昭

和四十四年頃ですね。

河端 通産省のとなりの飯野海運ビルの上のレストランに集まっていた頃ですね。四十四年秋ごろですよ。

吉田 年代は忘れたがよく集まったね（笑）

大久保 忘れたと思うようなことも多々あるが（笑）、覚えていますよ。法人資格をとる前、四十四年の十月頃から協会活動は始まったと思う。

舟渡 協会発足時の思い出とか苦労話が多いんですが、四十四年十月頃は十五〜六社で活動は任意団体で始まった……。

吉田 純粹主義だ。つまりソフトを専門にやる企業。これが誕生のバックボーンだったね。

昭和四十四年は西暦一九六九年に当たる。

——そんな昔のことで持ち出して、何の意味があるのか。——ただの懐古趣味ではないか。

と問われれば、筆者は回答に窮する。まず昔話と思えばいい。

三

「ソフト協」というのは、一九七〇年六月二十二日に発

足した社団法人ソフトウェア産業振興協会（SIA）のこ
と、「世界会議」とは一九八四年六月十一日から十三日ま
で、三日間にわたって東京・新宿の京王プラザホテルで開
催された世界情報処理産業会議のこと。

——どこかで目にしたことがある。

調べると、それは『社団法人ソフトウェア産業振興協会
十四年史』に掲載されていたものだった。奥付には「一九
八四年六月」とある。日本情報センター協会と合併し情報
サービス産業協会として発足するに際して、十四年間の協
会活動をまとめた。

サブタイトルにある「世界会議」は一九八一年に発足し
た国際組織「世界情報産業会議」のこと。世界主要国の情
報処理サービス／ソフトウェア業団体が二年おきを集まっ
て、各国の情報処理サービス／ソフトウェア産業の位置づ
けや市場規模、サービス高度化の方策などを協議した。

その後、米データ処理サービス機構（ADAPSO）、
ヨーロッパの業界団体が再編されたこと、日本の提案でア
ジア・太平洋諸国をカバーする新団体「アジア・太平洋地
域コンピュータリング・オーガニゼーション」（ASOC
IO）が発足したこと、受託計算業務に代わってソフトウ
ェア分野とネットワーク・サービスのウエイトが高まった
ことなどから、「世界情報技術サービス機構（WITSA）」

に改組された。

一九八四年に開かれた東京会議は、その二年前に開催さ
れたマドリッド会議（スペイン）で、ソフトウェア産業振
興協会の服部正会長が強力に招致して決定された。

会話の中に登場する人物を簡単に紹介しておく、「金
岡さん」とあるのはインテック社長の金岡幸二氏、「塚本
さん」はセンチュリリサーチセンタ（CRC）社長の塚
本祐造氏、「大野さん」は野村コンピュータシステム社長
の大野達男氏。この三人は計算センター業の黎明期を牽引
した（社名・肩書きはいずれも当時）。

「園部専務」は日本ソフトウェアの園部達郎氏。日本ソ
フトウェアのことは追って語ることになる。

「平松さん」は平松守彦氏。文中には「現大分県知事」
とあるが、二〇〇三年の統一地方選挙の際、六期二十四年
に及ぶ地域行政トップから引退した。

「服部さん」はソフト産業を代表する識者として知られ
た構造計画研究所所長の服部正氏である。「正」は「まこ
と」と読む。

また、大久保氏が語っている「ソフト業もセンター業も
一緒になって一つの団体」というのは、「日本情報処理産
業協会」構想のこと。当時の大蔵省・通産省の一部に、コ
ンピュータ産業を国策の中枢に据えるべく、国が出資する

ハードウェア・メーカー、情報処理サービス・ソフトウェア会社をそれぞれ一社設立する構想があった。その発想は日本国有鉄道、日本専売公社、日本電信電話公社と大きく違わない。

座談会で会話を交わしている人たちも、その会話に登場する人たちも、一九七〇年のころはみな四十代だった。設置されていたコンピュータは日本中で五千四百台弱、情報サービス産業の売上高は四百億円に満ちていなかった。「ソフトウェア業とは何か」が論じられていた時代だった。ただ間違いなく、年二〇％に近い高成長を続けていた。

それだけに誰もが夢中で取り組んでいた。中には協立計算の高島洋一氏のように、「青年将校」をもって任じている人もいた。まことに乱暴な話ながら、情報サービス産業の次の時代を担う意気込みを、二・二六の決起になぞらえようとしたのであろう。

いずれも情報サービス産業の基礎を築いた第一世代といつていい。気がつけば、多くの人が故人となっている。

筆者はたまに、

——自称ITマスコミの生きた化石。

などと冗談交じりに口にあることがある。以上の人々がバリバリの現役として会社経営と業界作りに邁進していたとき、直接言葉を交わしていることを考えると、あながち

間違いではない。

~~~~~ 補注 ~~~~~

**金岡幸二** かなおか・こうじ／1925～1993。東京都生まれ。旧姓は「石坂」。東京帝国大学在学中に陸軍に徴兵され、満州・奉天航空基地に飛行生として配属された。一九四五年八月、特攻の命令を受けたが終戦となり、復員して再度、東京大学に入った。

一九四九年東大工学部卒、東光電気、大学講師などを経て一九六四年「株式会社富山計算センター」を設立し専務。七〇年「インテック」に社名変更と同時に代表取締役社長となった。

**塚本祐造** つかもと・ゆうぞう／1918～1993。広島県生まれ。一九三八年海軍兵学校卒、海軍航空隊に入り真珠湾攻撃の第一波攻撃隊、ラバウル航空隊、横須賀基地で飛行教官、次期戦闘機のテストパイロットなどを経て首都防衛隊長少佐として終戦を迎えた。元軍人というだけで就職口がなかった。ようやく入社した野原産業という商社も倒産という憂き目にあつた。偶然、航空機部品の輸入を手がけようとしていた伊藤忠商事に元零戦パイロットの経験が評価されて入社、五五年航空機部長のとき米ベンディックス社が開発した技術計算用計算機「G-15」を輸入し、同機を設置した「東京電子計算サービス株式会社」を設立した。

**大野達男** おおの・たつお／野村証券に入り五五年情報システム部長、六六年「野村コンピュータシステム株式会社」設立と同時に取締役、七〇年常務、七二年社長。稲葉秀三のあとを受けて日本情報センター協会会長に就任し、受託計算サービス業の高度化、ソフトウェア業との融合、通信回線の第一次開放などに尽力した。

**平松守彦** ひらまつ・もりひこ／1924～2016。大分市生

まれ。一九四一年東京帝国大学に入り、四五年四月、繰上げ卒業で海軍主計学校に進んだが、終戦で再び東大に入り直した。四九年東大法学部を卒業し、商工省に入り産業公害課長を経て69年電子政策課長、74年国土庁長官官房審議官。電子政策課長のとき情報処理産業の育成振興が欠かせないことを訴え、情報処理振興事業協会等に関する法律の制定に尽力するとともに、IBM社によるコンピュータ特許クロスライセンス契約問題の解決や国産コンピュータ・メーカーのグループ化を推進した。

**服部 正** はつとり・まこと／1926～1983。東京都生まれ。一九五一年東京工業大学工学部を卒業して電気通信省に入った。一九五六年に独立し建設設計事務所を開設、五九年「株式会社構造計画研究所」を設立し社長。六一年「IBM1620」を導入し、コンピュータによる構造解析の受託サービスを開始すると並行して、情報処理サービスの健全な発展には業界団体の必要と訴え、東西に奔走した。六九年に「四社会」を結成し、これが七〇年発足の社団法人ソフトウェア産業振興協会の設立母体となった。



# 日本IT書紀 009 偶然の資料

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。